報告

汽水域における鮎のエサ釣り

── 高知県中土佐町久礼川 ──

常　光　　徹
TSUNEMITSU Toru

はじめに

高知県中土佐町を流れる久礼川（くれがわ）は、源を同町檮山（ゆすやま）（標高 842 m）に発し、狭流をなして南東に流れ久礼湾に注いでいる。流路延長 9.4 km、流域面積 40,96 km^2 の小さな河川だが、アユ、ウナギ、ハゼ、ウグイなどが生息している〔高知県 2012〕。筆者（1948 年生れ）は、小学校 5 年のころから高校時代まで（1959〜66 年）、夏の遊びの一つとしてこの川の下流域で鮎のエサ釣りを行っていた。河口から 1 km ほど遡ったところにベンガ淵と呼ばれる淵があり、この付近より下流は感潮域で潮の満ち引きによって川幅や水の深さが変化をする。今日、鮎釣りといえば友釣りが広く知られているが、久礼川は河川延長が短く、鮎も全長で 3、4 寸（約 9〜12 cm）ほどの小型が主で、縄張りをつくらないためであろうか、筆者の知る限り友釣りの姿を見かけたことはない。もっぱら毛バリ釣りかエサ釣りである。毎年、解禁日の 6 月 1 日には、釣り好きの大人たちは日の出とともに、河口から 0.5 km ほど上流にある通称大柳（おおやなぎ）と呼ぶ場所の岸に陣取って毛バリ釣りを始める。ここは、水の流れが緩やかで深みになっていて毛バリ釣りに適していたようだ。この釣りを行うのはもっぱら大人で子どもは参加しなかった。継竿の用意や毛バリの種類を揃えるのに費用がかかるだけでなく、天候や鮎の反応を見て毛バリを取り変えるなど知識や技術的な面でも子どもには無理な釣りだといってよい。釣り人はそれぞれが、竿、毛バリ、魚籠などに工夫を凝らしたものを使用し、時々、釣りの合い間に道具談義をしている場面を見かけた。今振り返ると道楽的な要素のつよい釣りだったように思う。

一方、エサ釣りは仕掛けが比較的簡単で子どもでも参加することができ、釣期も解禁から秋まで楽しめた。鮎をエサで釣る漁法は各地で行われており静岡県の天竜川などエサ釣りの盛んな川もあるが、ただ、友釣りのようにシーズン中に話題にのぼることは少ない。現在は、エサ釣り用の仕掛けがセットで売られていて、コマセをつける螺旋なども開発されているが、筆者の時代には釣り具屋にもこのようなセットは販売されておらず、仕掛けはそれぞれが用意をした。エサ釣りが行われている河川やその具体的な仕掛けなどについては、今後、現地調査や文献調査を進めねばならないが、おそらく、鮎のエサ釣りは汽水域でさかんな漁法ではないかと思われる。ここでは、1960 年代の前半に筆者が行っていた久礼川でのエサ釣りと、たも網による鮎とりを報告する。

1. 鮎のエサ釣り

竿は長さ３ｍ前後の竹竿だったが、できるだけ軟調でしかも腰のあるものがよい。かたい竿は、鮎のかかりが悪いと釣り上げたときに口が切れて逃がすことがあり、また、竿がしなやかな方が引きを楽しむことができる。釣針は釣り具屋では買わずに、鮎釣りを趣味にしていて釣り具を自分で作っている人のところに行って有料（１個５円）で分けてもらった。カエシのないごく小さな針で、釣り具屋で売っているものよりもさらに細くて繊細にできていて、久礼川の小鮎を釣るのに適していた。針の材質は不明だが、楽器の金属弦で作っていると聞いたことがある。錘は使い終わった絵の具のチューブ（鉛）をとっておき、薄く伸ばしたものをハサミで小さく三角形に切ってハリスに巻きつけた。ウキは小刀で木片を削り自分で作った。長さ 2.5 cm ほどだが、仕掛けが軽量で小鮎が対象のため小さいウキのほうが敏感に反応する。針には３毛（0.3 号）のハリスを結んだが、糸が切れたときのために予備を作っておく。用意した仕掛けや予備の針、和鋏などは小さな木箱に入れる。この釣り具を入れる木箱はわが家にあった。祖父か父が使っていたものではないかと思う。中が細かく仕切られていて仕掛けなどをいれるのに都合よくできていた。

ここまで準備ができると、エサにする魚を買いに大正町に行く。大正町は漁師がその日にとってきた魚貝類を売っている市場で新鮮な魚が安く手に入る。エサに用いるのは白身の魚である。小遣いで買うので高い魚は買えない。アジかカマスを 2、3 匹買う。エサが手に入ると、竿とブリキ製の丸いズック魚籠、エサのアジ（またはカマス）、釣り具を入れた木箱を持って川に行く。

川原に着くと釣る場所を決めて竿に仕掛けを取り付ける。ベルトの左の腰のほうに魚籠の先のひもを結び、右の腰には木箱を下げた。まず、エサのアジの頭と内臓を取り除き水でよくすすぐ。内臓が残っているとコマセ（カブシと呼んでいた）にするために噛んだとき口に苦味が残る。釣る場所は河口から１km ほど上流のベンガ淵までの間、つまり、潮の干満の影響を受ける汽水域である。ベンガ淵より上に行くと食いが落ちるためエサ釣りはほとんどこれより下だった。

筆者は、流れのある浅瀬を選んで釣ることが多かった。エサのアジは頭を取ったところから皮を少し剝いで身の部分をいくらか噛み切る。つぎに、小さく噛み砕いたアジの身を舌先にのせて指先にとり、米粒大のエサを針につける。口の中の身はコマセとして狙いをつけたところにプーッと吹きかけ、そこにエサをつけた針を入れる。コマセに集まってきた鮎が針のエサにも食いついてくる。コマセはそのまま吹くことが多かったが、ときどき川の水を掌にすくい取って口に含んで吹いた。そうするとコマセが広い範囲に飛ぶ。また、ねばねばした口の中がすっきりする効果もあった。コマセを吹く回数や間隔はそのときの釣れ具合によって異なる。

ウキの位置は瀬の深さによって調整する。針にカエシがないので道糸はたるませないようにし、ウキが沈むと同時に竿を持つ手首をクッとしめるような感じで反応する。瀬を流れるウキは鮎が食った瞬間、真下に沈むというよりも斜め下にキュッと引きこまれることが多い。ウキの動きとタイミングを合わせるために、糸を流すときは竿を持つ右手は肩よりもすこし高いぐらいのところで構えてたるみを少なくした。針のエサは１匹釣るごとに新しくつけるが、皮に近くて外れにくい部分だと一度つけたエサで数回釣れることもある。

鮎を釣り上げると腰から吊りさげている魚籠に入れる。水の入った魚籠のなかで泳ぎまわる鮎の数

がふえていくのが楽しい。ただ、同じ場所で釣り続けることはめったになく、食いが止まると移動をするのでその間にほとんど死んでしまう。よく釣れる時間帯は早朝と日暮れ時だといわれる。筆者は早朝の経験はとぼしいので何とも言えないが、かんかん照りの昼間よりも、夕暮れが近づいて川面に陰りがさすような時間帯に食いがよくなるのは経験的に頷ける。夕暮れ時に釣果をのばして、昼間の不漁をばん回した思い出は少なくない。台風などの大雨で川が増水した後もよく釣れる。大雨の直後はとても釣りのできる状態ではないが、3、4日して水が引いた後は面白いように釣れることがある。その原因はよくわからないが、大水で川底の石が流されたり裏返って鮎が食うコケが乏しくなるためではないかと言われていた。現在は新しい橋ができて無くなってしまったが、筆者が通っていたころは、久礼川の河口から300 mほど上に沈下橋があった。中学生のとき、台風の後でこの橋の上から120匹ほど釣った経験がある。沈下橋なので水面との距離が近く、コマセを吹くと群がりくる鮎の動きが見えて入れ食い状態であった。午後の数時間の釣りだったが、こうした体験をするとしばらくやみつきになる。

筆者が久礼川でエサ釣りを行っていた当時は、コマセは口で噛んで吹くのが普通だったが、一度だけ、白身の魚を擂ったコマセをバケツに入れて、柄杓のようなものでまきながら釣っているのを見たことがある。その人は、流れのゆるやかな深みで釣っていたが、筆者が瀬で釣っていた鮎よりも大きな型があがっていた。

現在、各地の鮎のエサ釣りでは一般にシラスを使用する川が多いようだが、ほかにも、オキアミで釣っている所がある。埼玉県志木市宗岡にある秋ヶ瀬取水堰は荒川にある可動堰である。河口から30 km以上あるがこの堰までは潮の満ち引きの影響があり、ボラやスズキなどがのぼってくる。落ち鮎の季節を迎えると堰の下手（汽水域）の岸には鮎のエサ釣りをする人が集まる。1993年10月に見に行ったときには、土手には釣り具を売る軽トラックが止まりにぎわっていた。エサやコマセにはオキアミを使っていた。鮎はさびてやせていたが、それでも川が大きいだけに全体に型が良く、なかには尺（約30 cm）近いものも釣れていた。

1960年代前半に久礼川で行っていたエサ釣りを中心に報告したが、次にたも網での鮎とりを紹介したい。

2. たも網で鮎をとる

筆者が久礼川で鮎をとった方法は、先に述べたエサ釣りのほかに、たも網でとるか、カナツキ（ヤス）で突くやり方であった。カナツキは長さ2 mほどの竹を使用し、先端にはモリ、尻にはゴム帯をつけたものである。ゴムを竹にそって伸ばした状態で握り、狙った鮎に向けて握りを離す。伸びたゴムの反動を利用して突く方法だが、鮎が小さいためカナツキで突くと魚体に大きな傷がつく。それに、夏場なのですぐに鮮度が落ち、食用にするには向かない。

ここでは、たも網でとる方法について述べる。

道具は簡単である。長さ1.5 mほどの握り具合のよい竹の先に網をつけたものである。直径25 cmくらいの真鍮の輪に深さ40 cmほどの網がついた、すくい網である。網の材料は、黒く染めた絹糸で編んだもの（キヌタマと呼んだ）と、テグスで編んだものの二通りを使用したが、よくとれたのは

絹糸の方だった。ただ、絹糸の網は切れやすいため、しばしば漁の途中で切れた部分を補修する必要があった。

この漁は浅瀬のそれも岸に近いところで行った。経験的には、晴天がつづいて川の水量が減り瀬の流れが見るからに浅くなっているようなときがよい。川原に着くと、まず1.5 m くらいの棒か笹竹を用意する（川原か川岸で拾ってくる）。右手にたも網を持ち、左手に棒を持って腰に魚籠をつけた格好である。この漁は汽水域に限定されるわけではないので、筆者は下流の瀬から始めて上流にのぼりながら漁をしていった。おそらく、一回の漁で 4〜5 km は歩いたと思う。

やり方は、まず、浅瀬のなかの適当な場所を見つけると、水中の石と石のあいだが 5〜15 cm ほど間隔が空いたところを探してそこに右手に持っているたも網をあてる。水流を受けて網はふくらむ。その状態のまま斜め後ろから、左手に持った棒で水面をパシャパシャ叩きながら数歩上に向かって歩く。ザボザボと音をたてながら追いかけるように歩くのがこつである。水面を叩く音と足音に驚いた鮎は上流に向って逃げるが、そのなかの一部はすぐにＵターンして勢いよく下ってくる。Ｕターンしないまでも前方にいた鮎のなかには、人の動きとは反対方向に移動するものがいる。このとき、下ってきた鮎は石と石とのあいだを通過しようとする。もちろんすべての鮎ではないがここを通過する確率が高い、というか、そのような場所を見つけて網をあてておく。鮎の黒い背が石のあいだを一瞬通過したと見たときにサッと網を上げると中に入っている、という具合である。鮎の行動のくせ（習性）を利用した漁といってよい。

網に入るのは通常は一匹だが、たまに二匹のこともあった。勢いよく下ってきた鮎が網に気づき、石の手前で身をひるがえして逃げることも多い。それはテグスの網に多かった。原因はわからないが黒く染めた絹糸の方が鮎には気づかれにくいようである。瀬のなかで鮎の逃げ道に適した石があれば、網をあてるのはどこでもよいが、多くの場合、岸近くの浅瀬で行ったのは、相対的に鮎の逃げて行く範囲が狭くなりその分狙った場所を通過する確率が高くなるからである。晴天が続いて瀬の水位が下がった状態がよいのもこのことと関係している。つまり、逃げていく鮎のコースを予想しやすいからである。ただし、浅瀬といっても、日照り続きで川が枯れ、極端に浅くなった場所には鮎はほとんどいない。

網をあてる良い場所がないときは、水中の石を組んで逃げ道になるすき間をつくった。適当な場所があったとしても、さらに鮎がそこを通過しやすいように石を組み直したことも少なくない。漁は、一回ごとに場所を変えながら川上に移動していくときもあれば、条件がよければ、同じ場所で数回たも網を入れる場合もある。瀬の下手からのぼり、瀬の切れるところでふたたび下手に戻るというように、一つの瀬で何度か繰り返すこともあった。

鮎とりをしている瀬の事情以外の要因が漁に影響を及ぼす場合がある。たとえば、漁をしている瀬の下の深場で子どもたちが泳いだりしているときなど、鮎は深場をはなれて浅瀬に移動するので、そんなときには良型のものがよくとれることがあった。

おわりに

エサ釣りとたも網による鮎とりを体験にもとづいて紹介したが、何がきっかけでいつからこうした漁に関心をもつようになったのか、はっきりした記憶はない。当時は学校にプールがなかったので、子どもの夏のあそび場はもっぱら川か海だった。とくに川は、魚釣りの大人から水浴びの子どもまでさまざまな人間が集まるところで、いわば異年齢間の交流の場であり機会でもあった。筆者の鮎とりも、大人や年長の者がやっているのを見て自然に興味をもったのではないかと思うが、ただ実際の技術は漠然とながめているだけではわからないことが多い。筆者の場合、影響を受けた釣り好きの大人が一人いる。近所に住んでいた黒原善次郎さん（大正生れ）で、まわりからは「黒原のおんちゃん」と呼ばれていた。町役場に勤めていたが、無類の釣り好きで鮎漁が解禁になると毎朝出勤前に川に行き、退勤後もまた川に行くという風だった。解禁日からしばらくは毛バリ釣りでその後はエサ釣りに切り替えていたが、鮎のほかにもヒゴでウナギを釣ったり、漁師から譲り受けたと思われる伝馬船を漕いで久礼湾でキスなどを釣っていた。落ち鮎のシーズンが終わっても秋風の吹く久礼川でハゼ釣りに興じていた。すぐ近所だったのでよく遊びに行ったが、炭火をおこして竿を矯めたり仕掛け作りをしていたし、ときには、釣ってきたハゼや落ち鮎をあぶる香ばしい匂いが家中に漂っていた。釣り好きが高じて、定年前に役場を退職し釣り具屋を開いたほどである。

筆者はよく黒原のおんちゃんについて鮎釣り、ウナギ釣り、キス釣りに行った。しかし、具体的な釣り方について直接教えてもらったことはない。というより、教えるとか教えられるという関係ではなかった。ただついて行って、そばで見たり真似事をしていたのである。おそらく、そうした関係のなかからポイントの見つけ方や竿の扱い、エサのつけ方などを自然に吸収していったように思う。現在は、釣りに関するさまざまな解説書やビデオなどが普及しているが、それらの類いもなかったので、実際には、黒原のおんちゃんの釣りを見よう見真似で覚えて自分なりに試行錯誤していたといってよい。筆者は高校卒業後、久礼を出たので釣りの知識も技術も未熟なままで止まってしまったが、かつて、釣りに興味を覚えた子どもたちがその技に習熟していく過程には、大なり小なり筆者のような体験を通した伝承の現場があったのではないかと考えられる。

参考

高知県　2012 年「久礼川水系整備計画」高知県
www.pref.kochi.lg.jp/uploaded/attachment/64658.pdf